

速 報

認知症にやさしい図書館の取り組みの進展

谷川 良博^{1†} 片山 智恵美² 山田 有夏²

抄 録

広島都市学園大学と広島市立中央図書館との連携事業を「認知症にやさしい図書館」と称して、2018年3月から2019年12月までに計3回実施している。この活動は公共図書館を通して、市民への認知症の啓発と認知症者や介護家族が集える場をつくることを目的にしている。2019年度の「認知症にやさしい図書館」の特色は、準備や展示に、①当学の図書館サークル学生が携わるようになったこと、②「認知症にやさしい図書館」の開催期間中に、認知症ブックカフェを実施したことである。認知症ブックカフェとは、多くの地域で実践されている認知症カフェの方式を図書館で実施するものである。地域の認知症カフェとの共通内容は茶話会であり、差別化の部分は図書館に蔵書されている認知症関連図書を活用した、読み聞かせや紹介（ブックトーク）を採り入れている点である。2019年度に開催した認知症にやさしい図書館と認知症ブックカフェの経緯を通して、その役割と今後の展開について報告をする。

Key words: 認知症 図書館 図書

1. はじめに

厚生労働省が発表した「認知症施策推進大綱」¹⁾では、政府一丸となって認知症の「予防」と認知症者との「共生」に向けた取り組みを推進すると示された。共生には、認知症者が多様な通いの場を選択できるように拡充する方針が示された。公共図書館についても言及され、認知症コーナーを設置するなどの取り組みの提案がなされた。認知症にやさしい図書館ガイドライン²⁾では、「認知症にやさしい図書館は、認知症に特化したものではなく、結果的にすべての人にやさしい図書館を意味する」と示して

おり、公共図書館が世代や障害の有無に関係なく利用できる場所となる目標を掲げている。

広島都市学園大学（以下、当学）と広島市立中央図書館（以下、中央図書館）との連携事業を「認知症にやさしい図書館」と称して、2018年3月から2019年12月までに計3回実施している。これは公共図書館を通して、市民への認知症の啓発と認知症者や介護家族が集える場をつくることを目的にしており、認知症に関する本を集めた特設コーナーや講座を展開している。2019年度の認知症にやさしい図書館の特色は、準備や展示に、①当学の図書館サークル学生（以下、サークル学生）が携わるようになったこと、②「認知症にやさしい図書館」の開催期間中に、認知症ブックカフェを実施したことである。認知症ブックカフェとは、多くの地域で実践されている認知症カフェ（認知症者やその介護家族、地域

受稿：2020年2月28日 受理：2020年3月27日

¹ 広島都市学園大学健康科学部リハビリテーション学科

² 広島都市学園大学附属西風図書館
広島市安佐南区大塚東3-2-1

住民が集って、創作活動や談話をして過ごす場所)の方式を図書館で実施するものである。地域の認知症カフェとの共通内容は茶話会(談話会)であり、差別化の部分は図書館に蔵書されている認知症関連図書を活用した、読み聞かせや紹介(ブックトーク)を採り入れている。この認知症ブックカフェでは、サークル学生の活動によって、企画内容の充実と参加者の満足感に大きく寄与した。2019年度に開催した「認知症にやさしい図書館」と認知症ブックカフェの経緯を通して、その役割と今後の展開について報告をする。

2. 認知症にやさしい図書館の概要

「認知症にやさしい図書館」は、1年に1回、各年度のテーマを決めて実施している。1回の開催期間は3ヶ月間である。テーマに関連した図書展示や講座の企画・実施をしている。図書の展示場所は、中央図書館2階自由閲覧室Bである。

2019年度は、テーマを「認知症の予防とリハビリテーション」として、9月14日から11月28日まで開催した。その他、感想ノートの設置、広報活動、講座、認知症ブックカフェ、ポスター展示(Fig. 1)を実施した。認知症ブックカフェの広報活動に際して、認知症の当事者や介護家族の

参加を呼び掛ける内容を記載した。2019年度の企画名称と取り組み内容をTable 1に示した。

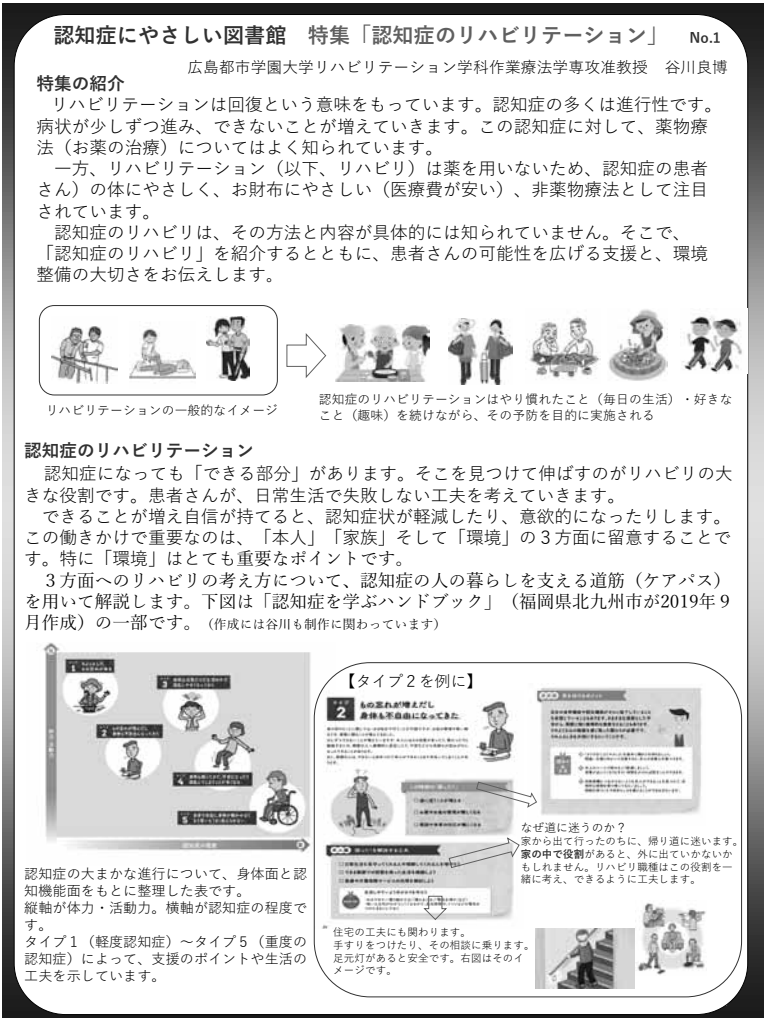


Fig. 1 認知症のリハビリテーションの紹介ポスター

Table 1 取り組みの内容と説明

企画名称	取り組み内容
展示コーナー	「認知症の予防とリハビリテーション」に関係した選書を行った。選書は一般市民向けに平易でわかりやすい図書を中心とした。図書の展示方法には図書サークル学生の創意・工夫を採り入れた。
講座	10月25日(10時~12時)に開催した。講座名を「認知症の予防とリハビリテーション」として開催した。講義と簡単な演習を取り入れた。参加者が毎日、続けられる運動の紹介の企画をした。
認知症ブックカフェ	11月17日(10時~12時)に実施した。2つの企画を採り入れた。①サークル学生による絵本の読み聞かせと図書の紹介、②茶話会の実施。参加者は6名程度のグループに分かれ、サークル学生(2~3名)との談話が楽しめるように企画した。
広報活動	①報道機関に開催の紹介を依頼した。②市政だよりに掲載した。③中央図書館・当大学のホームページで開催を紹介した。④各区の地域包括支援センターにチラシを配布した。
感想ノートの設置	展示コーナーに、認知症にやさしい図書館に関する感想を記載してもらうノートを設置した。
ポスター展示	図書の展示コーナーに、「認知症のリハビリテーション」(Fig.1)と題して、リハビリテーションの具体的な内容を紹介するポスターを設置した。

3. 各企画の結果

3.1 展示コーナー

展示コーナーで展示する図書の選書は、筆者と共同研究者、中央図書館職員との協議で決定した。選書した図書は4カテゴリーに分け、選書リストとして書名と著者名、出版社などを掲載した。Table 2にカテゴリー名とその冊数を示した。選書リストは特設コーナーに置き、市民が自由に持ち帰られるようにした。

展示方法については、サークル学生との話し合いをもとに、わかりやすさ、手に取ってみようと思える見せ方の工夫を取り入れた。サークル学生の発案で、①図書は全て面出し（図書の表紙が見える）にして展示する、②ポップ（紹介文）は手書きにして明るい雰囲気になるようにした、③図書の下にはその書影カード（表紙のコピー）を置くことで、本が借りられてもどのような本があったかわかるようにした、④書影カードの裏に書誌情報のレシートを貼り、それをカウンターに持って行くだけで予約ができるようにした、などの工夫を盛り込んだ（Fig. 2）。

展示コーナーやサークル学生が準備をする様子の写真は、厚生労働者により世界アルツハイマー月間中の日本での取り組みに「図書館における取組」²⁾として紹介された。

Table 2 選書リストのカテゴリー名称と冊数

カテゴリー名称	冊数
認知症のリハビリテーション	8
認知症の予防について	12
運動や食事で認知症を予防する	12
環境を整える	5



Fig. 2 特設コーナーの様子

3.2 講座開催

中央図書館の3階セミナー室で市民向け講座「認知症の予防とリハビリテーション」を実施した。受講者は70名であった。サークル学生は講座受付や受講アンケート配布係、演習のアシスタントを担った。受講アンケート回収率は81.4%であった。受講年齢は60～70歳台で71.9%（60歳台22.8%，70歳台49.1%）であった。講座の様子は中国新聞に掲載された（Fig. 3）。



Fig. 3 講座「認知症の予防とリハビリテーション」の様子
中国新聞社提供掲載日付2019年10月26日

3.3 認知症ブックカフェ

認知症ブックカフェ開催の告知は中国新聞で紹介された（Fig. 4）。中央図書館の3階セミナー室で認知症ブックカフェを実施した。参加者は31名であった。参加者の中には、認知症の当事者とその家族が数組参加されていた。サークル学生による絵本の読



Fig. 4 認知症ブックカフェの準備の様子
中国新聞社提供掲載日付2019年11月9日



Fig. 5 図書の読み聞かせの様子

み聞かせの様子を Fig. 5 に示す。アンケート回収率は 87.0% であった。参加者は 50 歳台 11.1%, 60 歳台 11.1%, 70 歳台 55.6%, 80 歳以上 11.1% と幅広い年齢が集っていたことがわかる。

3.4 感想ノート

特設コーナーに訪れた利用者から、「わかりやすい展示方法で助かった」、「このような取り組みを今後も継続して欲しい」、「広島市内の各図書館でも特設コーナーを開催してほしい」などの意見を得ることができた。これらの寄せ書きは、サークル学生にも見せて共有した。

4. 考察

「認知症にやさしい図書館」を 2 年間継続することで、講座参加者数の増加や新聞社の取材回数の増加につながっている。中央図書館では認知症ブックカフェを開催するのは初めてであったが、数組の認知症者と介護家族の参加が認められた。これらのことから、市民が認知症に対して関心を高めていることと、認知症に罹患しても図書館を「通いの場」と期待しているのではないかと推察できた。図書館は年齢に関係なく誰もが自由に出入り可能で、ゆっくりとした時間のなかで過ごすことができる身近な公共施設である³⁾。図書館職員への聞き取り調査の結果、「認知症にやさしい図書館」の開催中は認知症(かもしれない)者の来館が増えていることがわかった。彼らの来館の目的は、自身の症状を調べたり、病気そのものの知識を得たりするためであるようだ。そ

れが推察できるエピソードとして、図書館職員から聞き取った内容を紹介する。利用者から「私は認知症だが、初めに読む本は何がよいか」、「アルツハイマー病と診断されたので、どの本を読めば良いか」などである。このような方の多くは図書を借りずに、その場で読んで帰っていく。認知症関係の図書を自宅に持ち帰って家族に心配をさせたくないのか、図書館で読んだ方が理解しやすいからなのか様々な理由が考えられる。しかし、自身の症状を確認するのは、心情的に穏やかではないだろう。そのような心理状態で、他者からの干渉を受けにくい図書館の雰囲気は救いになるのかもしれない。このように、図書館を利用する目的は情報収集であったり、避難先であったりと様々な事柄が考えられる。「認知症にやさしい図書館」を継続することで、今後、図書館は認知症者にとっての第三の居場所になり得ると考えている。第三の居場所とは、家でも介護保険サービス先でもなく、自分だけの落ち着ける場所であり通う先でもある。

また、「認知症にやさしい図書館」の開催に際して、テーマを毎回変えている。その理由は、市民の多様なニーズに対応する狙いがある。さらに、そのメリットは、テーマに沿った図書を平易な内容のものから専門書まで幅広く収集するため、図書館の蔵書の選定に貢献できる点である。これは利用する市民にとって、情報収集の場として図書館を積極的に利用する理由となり得ると考えられる。このように「認知症にやさしい図書館」を継続することで多方面への利点が見えている。

認知症ブックカフェの構想と実施の理由は、先に述べた第三の居場所づくりを促進するためであった。そのため、プログラムを詳細に決めると落ち着いた雰囲気を壊しかねないと考え、大まかな申し合わせのみで進行することにした。プログラムの中心はサークル学生による絵本の読み聞かせとした。読み聞かせは、読み手がつくる「間」が雰囲気を醸し出し、声の強弱で聞き手の感情を揺さぶる臨場感がある。そのため、参加者各々が気持ちを落ち着かせるきっかけを作る目的で企画した。参加者の中にはハンカチで涙をぬぐう人や目を閉じて聞き入る人も多くいた。この精神的安定は、その直後に実施する

茶話会で、参加者が他者の話を傾聴するきっかけになったと考えられた。茶話会が始まると、参加者は当初、サークル学生に、大学生活や勉強内容などを質問していた。しばらく経つと、サークル学生が参加者の介護状況や趣味などの聞き役に回っていた。サークル学生の構成は1・2年生が中心であったが、認知症にやさしい図書館の準備を半年前から開始しており、自主勉強会や多くの話し合いの機会を経験していた。これらの半年間の経験が、茶話会での参加者の話を聞く共感性に活かされているように推察できた。サークル学生の感想では、「今までは、支援される側の人（弱者）としてみていたが、そのイメージが間違っていたことに気づいた」と述べている。学生がこのような実践教育を経験して得られる効果として、将来のイノベーション機会への影響⁴⁾が報告されており、彼らも貴重な経験をしたことが推察できる。参加者アンケートでは約80%が次の参加を希望していた。認知症ブックカフェ試行の結果、図書館が認知症者や介護家族の交流の場所として役割を果たせる示唆を得ることができた。

5. 今後の展開について

認知症者や介護家族が認知症ブックカフェに継続して参加できるように、定期開催を計画していく。そして、世代間交流も目的のひとつとして、図書館サークル学生はもとより他大学の学生に参加を呼び掛けていく。認知症ブックカフェを継続することで参加者と学生が共に過ごせる場所となるよう、彼らが共にできる作業を模索していきたい。

謝 辞

「認知症にやさしい図書館」開催に際して協力してくださった広島市立中央図書館職員や市民の皆様に深く感謝いたします。

なお利益相反に相当する事項はありません。

文 献

- 1) 厚生労働省. 認知症施策推進大綱.
入手先 <https://www.mhlw.go.jp/content/000522832.pdf> (2019/12/24)
- 2) 厚生労働省. 世界アルツハイマーデー及び月間（令和元年度）
入手先 <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/alzheimerday2019.html> (2019/12/25)

- 3) 小川敬之, 呑海沙織, 成合進也. Dementia Friendly Social-Resources の創生. 老年精神医学雑誌 2017; 28(5)477-484.
- 4) 河野禎之. 社会的課題としての認知症. 作業療法ジャーナル 2018; 52(1)62-66.

Progress of Dementia-friendly library initiatives

Yoshihiro TANIKAWA^{1†}

Chiemi KATAYAMA²

Yuka YAMADA²

¹ Department of Rehabilitation Faculty of Health Sciences, Hiroshima Cosmopolitan University
3-2-1 Otsukahigashi, Asaminamiku-ku Hiroshima, Hiroshima 731-3166, Japan

² Hiroshima Cosmopolitan University Seifu library